

# 鳥取県内の保育所・幼稚園の父母の子育て意識と 保育者の保育観に関する調査研究（１）

村 山 祐 一\*      板 倉 一 枝\*\*      大 上 綾 美\*\*\*

## A Research on the Nursing Consciousness of Parents and the Childcare Consciousness of Nursery Teachers at Child Care and Kindergarten in Tottori Prefecture（１）

MURAYAMA Yuichi \*, ITAKURA Kazue \*\*, OOGAMI Ayami \*\*\*

### は し め に

今日我が国では少子化の進行と女性の社会進出を背景に、男女共同参画社会の形成が政策の中心に据えられ、家庭と仕事・社会参加の両立支援、男女の協力による家庭育児のあり方が問われ、家庭育児への社会的支援がきわめて重要になってきている。「男は仕事、女は家庭」といういわゆる「性別役割分業」構造や意識の見直しなども社会的に求められてきている。

こうした社会状況の下で育児の社会化はさらに深化し始めている。今日では４・５歳児のほとんどが保育所・幼稚園に就園するようになり、さらに働く女性の継続的就労を求める傾向も強まり、産休・育休明けからの乳児保育や保育所の保育時間延長や夜間保育を求める要求も増える傾向にある。同時に核家族化の進行により育児の伝承や地域協力も衰弱化し、育児の個別化や密室化が広がり、育児不安が社会問題化しはじめている。とりわけ、「子どもが３歳になるまでは母親は育児に専念すべきだ」といういわゆる「３歳児神話」がいまだ根強くあり、育児責任を母親のみに求める風潮があり、母親の子育て不安を助長していると指摘されている。さらに社会的に子育て支援のシステムの整備の必要性が強調されるようになり、保育所・幼稚園においても子育て支援の視点から保育所・幼稚園のあり方の検討も求められてきている。その際、親の育児の実態や意識がどのような状況にあり、保育所・幼稚園での保育者がどのような育児観・保育観のもとで対応しているのか、両者にズレはないのか、適切な子育て支援の対応になっているのかといった課題を検討することが必要となってくる。

そこで私たちは鳥取県内の保育所・幼稚園に子どもを預けている父母及び保育者の育児・子育て意識や保育者の保育観がどのような状況にあるかを調査・分析することとした。とりわけ３歳の子どもの基本的な生活習慣の形成や子どもの生活時間のあり様、保育所・幼稚園と家庭との連携などを中心に、父母と保育者の意識状況の特徴や相互の比較検討をおこなった。今回は父母とりわけ母親の子育て意識の特徴について考察する。

## I. 調査の内容と方法

### 1. 保育所・幼稚園の父母への調査内容

アンケート調査の内容は, おおむね身辺自立ができると言われている3歳児の生活時間のあり様や基本的生活習慣の形成への期待と指導などを中心に次のような23項目から構成されている。

- 1) フェイスシート(子どもや家庭の状況) 8項目
- 2) 父母の育児観、子どもの生活時間や基本的生活習慣などについて 7項目
- 3) 保育所・幼稚園への通園状況について 5項目
- 4) 園や地域との関わりについて 3項目

### 2. 保育所・幼稚園の保育者への調査内容

保育者への調査は日常の保育のなかで、遊びやけんか、昼寝や食事への対応、文字や数への指導、送迎の時の子どもへの対応、保育計画の作成状況などについての考え方、さらに家庭の連携や子どもの基本的生活習慣形成への期待と指導についてなど以下の33項目から構成されている。家庭の連携や基本的生活習慣については父母向け調査と同じ内容の項目を設けて分析の際に比較できるように配慮した。

- 1) フェイスシート(保育者の年齢、勤務年数など) 8項目
- 2) 子どもの遊びやけんかへの対応や文字・数の指導などについて 6項目
- 3) 送迎、昼寝、食事への対応について 9項目
- 4) 家庭との連携について 3項目
- 5) 子どもの生活習慣について 5項目
- 6) 最近の親の子育てについて 2項目

### 3. 調査の対象などの概略

調査対象については鳥取県内の保育園・幼稚園を抽出し、電話で協力を依頼し、協力を得られた園の父母・保育者それぞれに無記名の質問紙法のアンケート調査用紙を送付し、実施した。なお県内の地域性に偏りがでないように対象者を東部・中部・西部、および市部・郡部から抽出し、調査を依頼した。

回収は回答用紙をそれぞれ封筒に入れて園に提出してもらい、締め切りまでに得られたものを各園でまとめて返送していただくような方法を取った。

個人ごとに封筒を用意したのはプライバシーに関わるような質問事項もあるため、その保護に配慮したためである。

調査方法	質問紙法
調査対象	鳥取県下の保育園、幼稚園から抽出した 父母 1152名、保育者 225名
調査時期	平成11年10月下旬から11月下旬にかけて
回収結果	父 母 914名(79.3%) 保育者 149名(66.2%)

## &lt;調査票回収結果の内訳&gt;

## 保育所・幼稚園の父母

	公立保育園	私立保育園	公立幼稚園	私立幼稚園	合 計
東 部	1 3 4	8 2	1 2 2	4 5	3 8 3
中 部	4 2	1 5 1	4 7	8 4	3 2 4
西 部	6 2	0	3 4	1 1 1	2 0 7
合 計	2 3 8	2 3 3	2 0 3	2 4 0	9 1 4

(回収率 79.3%)

## 保育者

	公立保育園	私立保育園	公立幼稚園	私立幼稚園	合 計
東 部	1 2	2 1	8	7	4 8
中 部	2 3	3 1	7	8	6 9
西 部	5	5	1	2 1	3 2
合 計	4 0	5 7	1 6	3 6	1 4 9

(回収率 66.2%)

## 4. 調査集計について

父母及び保育者向けのアンケートの単純集計の結果をもとに、保育者、父母のそれぞれの主な属性に関するクロス集計の結果も交えながら調査集計をおこなった。

調査データはMicrosoft-ExcelとSPSSを用いて統計を行った。クロス集計ではカイ二乗検定を行い、有意差を求めた。また、回答に「その他」という項目があったものについては個別に拾い出して分析し、有効と思われるものは考察に盛り込んだ。

## II. 調査結果と考察

## A. 被調査者（父母）の属性

- ① アンケートの記入者は、父が61人(6.7%)、母が838人(91.7%)、その他の人が9人(1.0%)であった。圧倒的に母親が多く、その他の記入者も祖母やおばといった、女性が多かった。父母の調査といっても、母親の意識調査といえる。
- ② 子どもの性別は、男が464人(50.8%)、女が445人(48.7%)であった。
- ③ 調査対象となる子どもの生まれた順番を見ると、1番目がもっとも多く428人(47.1%)、2番目が305人(33.6%)、3番目が156人(17.2%)、4番目が14人(1.5%)、5番目が5人(0.6%)、6番目が1人(0.1%)の順であった。
- ④ 施設別人数は、公立保育園238人(26.0%)、私立保育園233人(25.5%)、公立幼稚園203人(22.2%)、私立幼稚園240人(26.3%)であった。
- ⑤ 子どもが何歳児に属するかは、0歳児が33人(3.6%)、1歳児が34人(3.7%)、2歳児が

67人 (7.3%), 3歳児が163人 (17.8%), 4歳児が278人 (30.4%), 5歳児が265人 (29.0%) であった。0, 1歳児は7.3%、また約6割が4, 5歳児であった。

- ⑥ 母親の就労の有無については、全体では約7割強が何らかの形態で仕事をしている。仕事に従事していない母親は約4分の1である。保育所・幼稚園別にみると、保育所の場合は約9割強が働いているが、幼稚園においても約5割強が働いている (付表1)。

## B. 母親の育児・子育て意識についての結果と考察

### 1. 3歳児神話について

子どもの育児や子育てにおいて、3歳までの育て方の大切さが強調され、「三つ子の魂百まで」といことわざや「3歳児神話」という言葉で表現されたりする。また、3歳児前後の成長が第1反抗期や自己主張ということで特徴づけられる。乳児期は周囲の大人たちに守られ依存しながら、人や物とのやりとりを介して外界との関わりを豊かにしたり、歩行や食事・排泄・衣服の着脱等の基本的な生活習慣を身につけるなど生活の自立化も進み、2歳後半から3歳前後は自我の芽生えがはじまる。その営みのなかで、友達とぶつかり合ったり、大人や親に「反抗」したりするなど自己主張をしたり、不安定になったりしつつ自分の世界を広げていくということで社会化への一歩を踏み出すのである。このように、発達論的にも3歳前後は子どもの成長・発達の大きな節目であり、3歳児前後までの育ちがきわめて重要であることは明白である。

この「3歳児神話」という言葉には「3歳頃までの乳幼児は子どもの発達にとってきわめて重要である」という意味も含まれている。その意味ではきわめて当然な内容といえる。しかし、この主張がまず、「本来子どもへの愛情と適性は母親にあり、子育ては母親が最も適している」といった「母性神話」と結びつき、「乳幼児期には母親は家庭で育児に専念することが望ましい、母親が育児に専念しないと子どもの将来の成長に歪みを残す危険性が高い」などといった考え方を助長していった。そして「3歳児神話」は、「乳幼児期の成長・発達的重要性」と「母親の育児専念責任」とを結びつけて、「3歳までは、常時家庭において母親の手で育てるべきである」といった考えとして普遍化し、親や保育者の育児・子育ての意識や考え方に大きな影響を与えた。

しかも、「女は家庭・育児、男は仕事」といった「性別役割分業」意識を助長し、1960年代の高度経済成長政策の「女性よ家庭へ帰れ」政策の合理的根拠として使われていったのである。そして、女性の社会や就労への参加を阻む根拠となり、また、父親を家庭・子育てから排除する要因、早期教育への過剰な関心をかき立てる要因ともなった<sup>(1)</sup>。

「3歳児神話」への批判的検討もされてきたが<sup>(2)</sup>、厚生省は初めて「平成10年版厚生白書—少子化社会を考える」において、この「3歳児神話」による母親への過剰な期待や責任から、子育てへの「重圧や負い目を感じ、時には多くのストレスをためながら子育てをしている母親も少なくない」として、育児不安の大きな要因になっていることを認め、「3歳児神話」には「合理的な根拠は認められない」と強調するに至った<sup>(3)</sup>。

しかしながら「3歳児神話」はこれまでの歴史的経過もあり、国民の間に根深く定着していることも事実である。例えば、「第10回出生動向基本調査 (平成4年)」によると、「少なくとも子どもが小さいうちは、母親は仕事をもち家にいるのが望ましい」という問に対して、「まったく賛成」47.9%、「どちらかといえば賛成」40.2%と約9割の女性が賛成している (表1)。年代別に賛成をみ

ると、20代、30代は微減しているが、40代では90%を超える。賛成について、仕事の有無別で見ると、無職・家事では93%と高く、専業主婦層ではほとんどがこの考えに賛成しているといえるが、有職者は84.8%にとどまっている。しかも有職者について、職業別に賛成をみると、専門・管理職では69%と低い、事務・販売・サービス84%、さらにパート・臨時雇いは89%と高く、明らかに有意差がみられる。

また、ベネッセ教育研究所「子育て生活基本調査報告書」(1998年3月刊、以下「98年ベネッセ生活基本調査」と呼ぶ)では、幼児と小1、2年生を持つ母親を対象に、A「子どもが3歳くらいまでは母親が育てたほうがいい」、B「必ずしも母親でなくても、愛情をもって育てればいい」の2つの意見のうちから自分の気持ちに近いほうを選択させている。それによると、専業主婦層はAの意見つまり「3歳児神話」賛成が81.3%と高く、パート層も71.9%と専業主婦層に近いが、常勤者は46.5%と低い(表2)。これは、前述の「出生動向基本調査」とほぼ同じ傾向といえる。だが、賛成の割合がやや低いのは、90年頃と97年という時代の変化とベネッセ調査が子どもを持つ若い層に限定していることからの影響と考える。

鳥取県内の保育所・幼稚園に子どもを預けている親(主に母親)の3歳児神話についての認識状況について検討してみる。

私たちの調査では「子どもが3歳になるまでは母親は育児に専念すべきだ」という、いわゆる「3歳児神話」の考え方に“賛成”(「まったく賛成」と「どちらかといえば賛成」)か“反対”(「まったく反対」、「どちらかといえば反対」)かを尋ねた。「まったく賛成」(積極的賛成)が12.3%、「どちらかといえば賛成」(消極的賛成)が65.4%であり、両者をあわせた“賛成”が77.7%であり、「どちらかといえば反対」(消極的反対)が16.4%、「まったく反対」(積極的反対)が2.4%と両者をあわせた“反対”は18.8%である。これは前述の「98年ベネッセ生活基本調査」とほぼ同じ傾向にあるといえる。

次に“賛成”の内容についてみると、積極的賛成はきわめて少なく、「どちらかといえば賛成」という条件付賛成(消極的賛成)が約85%を占めている。“反対”の場合も同様に、条件付反対(消極的反対)が約87%を占めている。この点は前述出生動向調査と大きく違う点である。また、「どちらかといえば」という条件の内容がどのような意味を持っているかを調べないとその賛否の状況は正確に把握できない。「どちらかといえば」といった条件の内容によってはそれほど変わらないということもありうる。その意味で「3歳児神話」についてどのような内容として受け止めているかを検討しなければならないと考える。今回の調査では明らかにできなかったため、2000年度の調査で試みたので別の機会に報告する。

「3歳児神話」の認識状況について、親の生活状況により「賛成」、「反対」に変化がみられるかどうかを分析するため、クロス集計をおこなった。クロス集計で有意差が認められた<母親の就労の有無別><保育所・幼稚園別>について検討する。

<母親の就労の有無別>でみると、3歳児神話に“賛成”(積極的賛成+消極的賛成)は母親が働いていない層では89.5%と高いが、働いている層では77.3%とやや少ない。“反対”(積極的反対+消極的反対)についてみると、働いている層では22.7%だが、働いていない層10.5%と大変少ない。次に“賛成”、“反対”の内容を分析すると、働いていない層と働いている層との間に大きな違いが見られる。消極的賛成はいずれもほぼ同じ割合だが、積極的賛成では、働いていない層が働いている層の約2倍強の21%と有意差が認められる。“反対”についてみると、積極的反対の割合はいずれもわずかであり差は見られないが、消極的反対は働いている層が働いていない層の約2倍強の20%

表1 子育てと仕事について(1)

		少なくとも子供が小さいうちは、母親は仕事を持たず家にいるのが望ましい。					
		総数	全く賛成	どちらかといえば賛成	どちらかといえば反対	全く反対	不詳
妻の年齢	総数	8844	4232	3555	671	217	169
		100.0%	47.9%	40.2%	7.6%	2.5%	1.9%
	25歳未満	283	139	103	31	8	2
		100.0%	49.1%	36.4%	11.0%	2.8%	0.7%
	25～29歳	1158	499	496	124	27	12
		100.0%	43.1%	42.8%	10.7%	2.3%	1.0%
	30～34歳	1649	696	727	138	65	23
		100.0%	42.2%	44.1%	8.4%	3.9%	1.4%
	35～39歳	1842	843	754	159	46	40
		100.0%	45.8%	40.9%	8.6%	2.5%	2.2%
妻の現在の職業	40～44歳	2269	1162	870	145	48	44
		100.0%	51.2%	38.3%	6.4%	2.1%	1.9%
	45～49歳	1643	893	605	74	23	48
		100.0%	54.4%	36.8%	4.5%	1.4%	2.9%
	主として農林水産業	167	88	62	11	1	5
		100.0%	52.7%	37.1%	6.6%	0.6%	3.0%
	自家営業	758	373	290	65	17	13
		100.0%	49.2%	38.3%	8.6%	2.2%	1.7%
	専門・管理職	664	174	285	132	58	15
		100.0%	26.2%	42.9%	19.9%	8.7%	2.3%
妻の現在の職業	事務・販売・サービス	1206	458	551	126	51	20
		100.0%	38.0%	45.7%	10.4%	4.2%	1.7%
	現場労働	379	186	150	25	9	9
		100.0%	49.1%	39.6%	6.6%	2.4%	2.4%
	パート・臨時雇い	1795	902	693	133	34	33
		100.0%	50.3%	38.6%	7.4%	1.9%	1.8%
	無職・家事	3736	1999	1471	168	44	54
		100.0%	53.5%	39.4%	4.5%	1.2%	1.4%
	学生	2	1	1	0	0	0
		100.0%	50.0%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%
その他		52	19	22	5	2	4
		100.0%	36.5%	42.3%	9.6%	3.8%	7.7%
不詳		85	32	30	6	1	16
		100.0%	37.6%	35.3%	7.1%	1.2%	18.8%

厚生省人口問題研究所「第10回出生動向基本調査」(1992年)

付表1 母親の就労の有無(保育所・幼稚園別)

	無職	有職	合計
保育所	34	412	446
	7.6%	92.4%	100.0%
幼稚園	187	220	407
	45.9%	54.1%	100.0%
合計	221	632	853
	25.9%	74.1%	100.0%

(漸近有意確率 .000)

表2 子育てと仕事について(2)

	専業主婦	パートタイ	常勤者	全体 (%)
A 子供が3歳くらいまでは母親が育てた方がいい	81.3	71.9	46.5	66.6
B 必ずしも母親でなくても愛情を持って育てれば	18.7	28.1	53.5	33.4

ベネッセ教育研究所「子育て生活基本調査報告書」(1998年3月)

表3-1 「3歳児神話」について(母親就労有無別)

母親就労有無別	全く賛成	どちらかといえば賛成	どちらかといえば反対	全く反対	合計
合計	101	563	141	20	825
	12.2%	68.2%	17.1%	2.4%	100.0%
無職	46	150	19	4	219
	21.0%	68.5%	8.7%	1.8%	100.0%
有職	55	413	122	16	606
	9.1%	68.2%	20.1%	2.6%	100.0%

(漸近有意確率 .018)

表3-2 「3歳児神話」について(保育所・幼稚園別)

	全く賛成	どちらかといえば賛成	どちらかといえば反対	全く反対	合計
保育所	31	301	106	14	452
	6.9%	66.6%	23.5%	3.1%	100.0%
幼稚園	81	297	44	8	430
	9.1%	68.2%	20.1%	2.6%	100.0%
合計	112	598	150	22	882
	12.7%	67.8%	17.0%	2.5%	100.0%

(漸近有意確率 .000)

表4 子どもの生活時間について(総計)

生活時間	①起床	②朝食	③TV	④おやつ	⑤夕食	⑥就寝
決めて守っている	165	122	38	64	90	138
	18.3%	13.6%	4.3%	7.1%	10.0%	15.4%
ほぼ決めていない	634	647	279	427	679	661
	70.3%	71.9%	31.3%	47.6%	75.7%	73.9%
あまり決めていない	75	110	393	273	100	72
	8.3%	12.2%	44.2%	30.4%	11.1%	8.0%
とりたて決めていない	28	21	180	133	28	24
	3.1%	2.3%	20.2%	14.8%	3.1%	2.7%
合計	902	900	890	897	897	895
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

に達している (表3-1)。

このように、働いていない層は積極的賛成が一定の割合を占め、全体として賛成の傾向にあるといえる。これに対して働いている層は積極的賛成も積極的反対も少なく、消極的賛成が最も多く、同時に消極的反対も一定の割合を占めていて、きわめて慎重な対応を示している。これは、3歳児神話へのこだわりが徐々に変化し、その解釈も多様化し始めつつあるのではないかと推測できる。その意味では3歳児神話への根強い賛成が徐々に崩れはじめているともいえる。具体的検討は2000年度の調査分析で行うこととする。

<保育所・幼稚園別>では、<母親の就労の有無別>と類似している。幼稚園に通う子を持つ親の層は母親の働いていない層とほぼ同じ傾向にあるが、積極的賛成が微減、消極的賛成が微増しているという若干の変化も見られる。これは幼稚園の親の約5割強が何らかの形態で働いていることと関連している。これに対して保育所に通う子を持つ親の層は働いている層に大変近いが、積極的賛成、消極的賛成のいずれもがわずかに数%減少し、積極的反対、消極的反対のいずれも増え、「反対」が26.6%に達している (表3-2)。3歳児神話への反対は保育所に預けている層が最も多いということになる。これは、働いている母親が保育所に子どもを預け、保育所保育の営みを通して子どもの成長の姿を実感することで、3歳児神話の不合理性に気づいたことのあらわれといえるのではない。

## 2. 子どもの生活時間について

近年、子どもたちが夜型になってきて、生活習慣がきちんと身に付いていないのではないかとといった心配や指摘が目立ち始めている。そこで、親が子どもの育児・しつけにどのように対応しているかを検討するために、子どもの生活時間をどのように考え、3歳前後までに基本的な生活習慣を身につけさせることや指導・援助についてどのように考えているかを検討してみた。

子どもの生活時間に関して①起床時間 ②朝食時間 ③テレビ・ビデオ・ゲームの時間④家庭でのおやつ時間 ⑤就寝時間の6項目について、それぞれ「決めて守っている」「ほぼ決めていない」「あまり決めていない」「とりたてて決めない」の4選択肢で答えてもらった。その結果は表4の通りである。

「決めて守っている」と「ほぼ決めていない」をあわせた「決めていない」の割合が高いのは⑤就寝時間 (89.3%)、①起床時間 (88.6%)、そして⑤夕食時間 (85.7%)、②朝食時間 (85.5%) の順である。①起床時間 ②朝食時間 ⑤夕食時間 ⑥就寝時間については、8割以上が「決めていない」であり、なかでも、①起床時間は「決めて守っている」が2割弱と多く、大変気にしていることがうかがえる。⑤夕食時間は「決めて守っている」が1割であり、「ほぼ決めていない」ということでやや柔軟に対応しているようだ。「あまり決めていない」と「とりたてて決めない」をあわせた「決めていない」はいずれも10～15%にすぎない。

これらと対照的なのが④家庭でのおやつ時間及び③テレビ・ビデオ・ゲームの時間である。「あまり決めていない」「とりたてて決めない」は、④家庭でのおやつ時間では45.2%、③テレビ・ビデオ・ゲームの時間では64.4%とほかの項目に比べて突出して多い。特に③テレビ・ビデオ・ゲームの時間は「とりたてて決めていない」が約2割、「あまり決めていない」が4割強であり、決めない傾向が強い。テレビ・ビデオの視聴時間帯について、ベネッセ教育研究所の調査においても、その傾向がみられる<sup>(4)</sup>。つまり未就園児 (1歳6カ月～3歳10カ月) は、テレビ視聴は朝8時～9時

頃、夕方は4時～6時がピークとなっているが、「約2～3割は朝7時から夜11時くらいまでテレビ・ビデオを見て過ごす様子がうかがえる」。テレビ視聴について、幼稚園児は夕方4時頃～8時頃、保育園児は夕方5時頃～9時頃が特に集中しているが、ビデオ視聴は幼稚園で3時から6時頃、保育園児で夕方5時～8時半頃まで2～3割の視聴率となっている。

テレビの時間やおやつの時間は家庭の生活スタイルによって比較的柔軟に対応ができるということを考慮しても、これらの時間を決めて守ろうとする姿勢が他に比べて低いということは、子どもたちが生活のリズムを乱し、メリハリのない時間を過ごしてしまう可能性が高くなるのではないだろうかと危惧される。

そこで、③テレビ・ビデオ・ゲームの時間と④おやつの時間とをクロス集計してみたのが、表5である。

まず③テレビ・ビデオ・ゲームの時間についてみると、テレビなどの時間を“決めている”層のうち約72%はおやつの時間も“決めている”と回答している。またテレビなどの時間を“決めていない”層の約55%の人がおやつの時間も“決めていない”としている。これに対し④おやつの時間についてみると、やや傾向が異なり、おやつの時間を“決めている”層の場合はテレビなどを“決めている”は約47%にとどまり、“決めていない”が約5割強となり、大きく2つに分かれている。しかも、おやつを“決めていない”層のうち約8割弱はテレビなどの時間も“決めていない”と回答している。

これらのことから、テレビ・ビデオ・ゲームの時間を“決めている”家庭の多くはおやつの時間も“決めている”という傾向にある。しかし、おやつ時間を“決めている”家庭でも、テレビなどの時間については“決めている”と“決めていない”とに分かれる。だがおやつの時間を“決めていない”場合はそのほとんどがテレビなどの時間も“決めていない”という傾向を示している。

以上のことを、テレビなどの時間“決めている”“決めていない”とおやつの時間“決めている”“決めていない”の4つの層に分類して見ると次のような特徴が指摘できる。

テレビなどの時間、おやつの時間いずれも“決めている”と回答した人は約26%にとどまっている。テレビなどの時間も“決めていない”しおやつの時間も“決めていない”と回答している人が約36%に達し、最も多い。次にテレビなどは“決めていない”がおやつの時間は“決めている”人が約29%を占めている。またテレビなどは“決めている”がおやつの時間は決めていないは約10%と最も少ない。

おやつの時間もテレビなどの時間も“決めている”家庭が約4分の1しかないのに、逆におやつ時間もテレビなどの時間も“決めていない”家庭が約3分の1強にも達しているということは、きわめて深刻な問題ではなからうか。おやつもダラダラ食べながら、テレビもダラダラ見ている生活スタイルが広がるのではないかと危惧される。あらためて、子どもの生活リズムを考えるうえでおやつとテレビなどの時間を決めることの意義と親と子で生活リズムをどのように築いていくかを考え直す必要があるように思う。

次に項目別にクロス集計の結果をみることにする。

#### ①起床時間

<保育所・幼稚園別>でみると、保育所は「決めて守っている」20.8%、「ほぼ決めている」68.4%とあわせて約9割に達する。幼稚園でも「決めて守っている」15.7%、「ほぼ決めている」72.3%とあわせて約9割弱である。しかし、その内容を分析すると、「決めて守っている」については保育所がやや高い。これは母親が働いていることから、保育所に預ける時間も決められてくることに影



響されているといえる。

## ②朝食時間

＜保育所・幼稚園別＞では有意差は見られない。あえて指摘するなら、“決めている”はいずれもが85%だが、その内容において、保育所の方が「決めて守っている」が16.3%と幼稚園(10.7%)よりやや高い。逆に「ほぼ決めている」は保育所68.8%、幼稚園75.2%となっている。保育所の方がやや決めている度合いが強いように思える。

## ③テレビ・ビデオ・ゲームの時間

＜保育所・幼稚園別＞では「決めて守っている」と「ほぼ決めている」をあわせた“決めている”は保育所32.0%に対して幼稚園39.4%とやや高い。「あまり決めていない」はいずれも44%台だが、「とりたてて決めていない」は保育所23.8%に対して幼稚園は16.5%とやや低い。「あまり決めていない」と「とりたてて決めていない」をあわせた“決めていない”は幼稚園では60.5%だが、保育所では68.1%と高い。保育所の方が決めていない傾向が強いといえる(表6-1)。これは、保育所の子どもは保育所での生活が一日の大半を占めていることを考慮しても、夕方・夜の生活、休日の生活を考えるとやはり問題があるように思える。

この傾向を子どもの年齢別でみると、低年齢ほど“決めていない”の割合は7～8割と高い(表6-2)。ベネッセ教育研究所「第2回幼児の生活アンケート報告書」でも指摘されているが、乳児からテレビ・ビデオをだらだらと見るのが日常化していることは深刻に受け止めるべき課題ではないだろうか。

＜性別＞では男の子の方が女の子よりも決めている傾向が強い。“決めている”と“決めていない”の割合は男の子で40.4%対59.5%、女の子では30.6%対69.4%となっている。

## ④家庭でのおやつ時間

＜保育所・幼稚園別＞では幼稚園と保育園とは明白な差がみられる。幼稚園の場合は“決めている”が63.7%と多数派になっているが、“決めていない”が36.3%ある。しかし保育所の場合は“決めていない”が53.9%と多いが、“決めている”も46.2%とほぼ拮抗している(表7)。＜母親の職業の有無別＞でみると、“決めている”は母が仕事をしていない場合は70.0%で多数であり、有職者の場合は49.5%にとどまっている。これは保育所を利用している場合は日常的にはおやつを保育所で食べていることが影響しているといえよう。母親が働いていない家庭では7割がおやつ時間を決めている。しかし、働いていない専業主婦の家庭や幼稚園通園児において、約3～4割弱がおやつ時間を決めていないということは見過ごすことのできない問題のように思える。

## ⑤夕食時間

＜母親の職業の有無別＞で有意差が認められる。“決めている”は母親が働いている場合は91.8%ときわめて高いが、働いていない場合はやや低く83.6%である。有職者の場合、ほとんどの家庭で夕食時間をきめているということになる。働いていない家庭の場合は“決めていない”は有職者の2倍の16.4%であり、夕食をきちんと決めない家庭が一定ある。母親が働いている場合は翌朝の起床時間をふまえておかないといけないことから、夕食時間をきちんと決めることが求められるからであろう。働いていない家庭では柔軟に対応できることから、夕食時間をきちんと決めない層が一

表 5 子どもの生活時間について—③TVと④おやつのクロス

生活時間			④おやつ時間				合計
			決めている		決めていない		
			決めて守っている	ほぼ決めて いる	あまり決めて いない	とりたてて決 めていない	
⑤ TV・ ビデオの時間	決 め て い る	決 め て 守 っ て い る	12 31.6% 18.8%	18 47.4% 4.3%	5 13.2% 1.8%	3 7.9% 2.3%	38 100.0% 4.3%
		ほ ぼ 決 め て 守 っ て い る	28 10.0% 43.8%	171 61.3% 40.6%	61 21.9% 22.3%	19 6.8% 14.5%	279 100.0% 31.4%
		あ ま り 決 め て い な い	14 3.6% 21.9%	170 43.4% 40.4%	158 40.3% 57.9%	50 12.8% 38.2%	392 100.0% 44.1%
		と り た て 決 め な い	10 5.6% 15.6%	62 34.4% 14.7%	49 27.2% 17.9%	59 32.8% 45.0%	180 100.0% 20.2%
	合 計		64 7.2% 100.0%	421 47.4% 100.0%	273 30.7% 100.0%	131 14.7% 100.0%	889 100.0% 100.0%

(漸近有意確率 .000)

(漸近有意確率 .000)

表6-1 子どもの生活時間「TV・ビデオ・ゲームの時間」  
(保育所・幼稚園別)

	決めて守っている	ほぼ決めて守っている	あまり決めていない	とりたてて決めない	合計
保育所	24	121	201	108	454
	5.3%	26.7%	44.3%	23.8%	100.0%
幼稚園	14	158	192	72	436
	3.2%	36.2%	44.0%	16.5%	100.0%
合計	38	279	393	180	889
	4.3%	31.3%	44.2%	20.2%	100.0%

(漸近有意確率 .002)

表 7 子どもの生活時間「家庭でのおやつの時間」  
(保育所・幼稚園別)

	決めて守っている	ほぼ決めて守っている	あまり決めていない	とりたてて決めない	合計
保育所	26	186	160	87	459
	5.7%	40.5%	34.9%	19.0%	100.0%
幼稚園	38	241	113	46	438
	8.7%	55.0%	25.8%	10.5%	100.0%
合計	64	427	273	133	897
	7.1%	47.6%	30.4%	14.8%	100.0%

(漸近有意確率 .000)

表6-2 子どもの生活時間「TV・ビデオ・ゲームの時間」  
(子どもの年齢別)

	決めて守っている	ほぼ決めて守っている	あまり決めていない	とりたてて決めない	合計
0歳児	3	6	7	13	29
	10.3%	20.7%	24.1%	44.8%	100.0%
1歳児	3	8	13	9	33
	9.1%	24.2%	39.4%	27.3%	100.0%
2歳児	3	7	35	22	67
	4.5%	10.4%	52.2%	32.8%	100.0%
3歳児	9	39	76	36	160
	5.6%	24.4%	47.5%	22.5%	100.0%
4歳児	8	94	116	53	271
	3.0%	34.7%	42.8%	19.6%	100.0%
5歳児	10	100	112	41	263
	3.8%	38.0%	42.6%	15.6%	100.0%
合計	36	254	359	174	823
	4.4%	30.9%	43.6%	21.1%	100.0%

(漸近有意確率 .000)

表 8-1 子どもの生活習慣形成への期待度

	ぜひと出来るように	なるべく出来るように	出来るように努力	出来なくてもいい	計
第一グループ	①朝食	733	144	24	901
		81.2%	15.9%	2.7%	100.0%
	②あいさつ	662	199	38	905
		73.1%	22.0%	4.2%	100.0%
第二グループ	③排便	404	379	98	901
		44.8%	42.1%	10.9%	100.0%
	⑤服の着脱	329	327	228	905
		36.4%	36.1%	25.2%	100.0%
第三グループ	⑧手洗い	403	317	177	905
		44.5%	35.0%	19.6%	100.0%
	⑨片付け	404	314	177	904
		44.7%	34.7%	19.6%	100.0%
第四グループ	⑩言葉	378	360	160	904
		41.8%	39.8%	17.7%	100.0%
	⑪区別	170	313	286	905
		19.1%	35.1%	32.1%	100.0%
第五グループ	⑦歯磨き	238	295	313	905
		26.3%	32.6%	34.8%	100.0%
	④ひとり寝	123	273	225	904
		13.6%	30.3%	24.9%	100.0%
第六グループ	⑥服をたたむ	119	269	387	904
		13.2%	29.8%	42.8%	100.0%

定いるのであろう。

#### ⑥就寝時間

主な属性との相関は認められなかった。「ほぼ決めている」割合は6項目中一番高く、さらには「決めて守っている」割合も①起床時間に次いで高く、生活リズムの基礎となっていることがうかがえる。

### 3. 子どもの生活習慣への期待度について

子どもの生活習慣に関して3歳のうちにどの程度できるようになって欲しいか期待度について調べてみた。それは、①毎朝朝食をとる②おはようございます、いただきますなどのあいさつをする

③排便を習慣づける ④ひとりで寝付く ⑤服をひとりで脱ぎ着する ⑥脱いだ服をたたむ ⑦ひとりで歯磨きをする ⑧手洗い・うがいをする ⑨おもちゃの後かたづけ ⑩自分の要求をことばで伝える ⑪前後・左右・表裏・大小・多少の区別をするの11項目について、「ぜひとも出来るようになって欲しい」「なるべく出来るようになって欲しい」「出来るように努力はして欲しい」「出来なくてもかまわない」の4選択肢で答えてもらった。ここでは「ぜひともできるようになって欲しい」と「なるべくできるようになって欲しい」を“できるようになって欲しい”層として位置づけてみた。この“できるようになって欲しい”の強い度合いで大きく区分すると90%前後、70～80%、50%台、40%台の4つのグループにわけて検討してみる(表8-1)。

まず第1のグループ、①毎朝朝食をとる(97.1%)、②おはようございます、いただきますなどのあいさつをする(95.1%)、③排便を習慣づける(86.9%)の順であった。特に①と②は「ぜひとも」が7割、8割と大変高いが、③は「ぜひとも」と「なるべく」とが4割台であり、期待の度合いがやや異なっているようだ。いずれも<保育所・幼稚園別>で見ても、差はみられない。あえていえば、いずれも保育所の方が「ぜひともできるようになって欲しい」が5～6ポイント高く、自立への期待度がやや強い。

第2のグループ、⑩自分の要求をことばで伝える(81.6%)、⑧手洗い・うがいをする(79.5%)、⑨おもちゃの後かたづけ(79.4%)、⑤服の着脱(72.5%)、の順であるが、⑩、⑧、⑨は「ぜひとも」が40%台であるが、⑤は36%とやや低い。<保育所・幼稚園別>でみると⑧を除いて有意差が認められる(表8-2)。

⑨後かたづけでは“できるようになって欲しい”層は保育所85.3%と大変高いが、幼稚園72.6%にとどまっている。その内訳をみると、「なるべく出来るように」はそれぞれ34～35%台と差はないが、「ぜひとも」層は幼稚園37.2%に対して保育所51.5%と高く、顕著な差が見られる。それ故、「努力して欲しい」は保育所14.0%と低い、幼稚園は25.3%と高い。保育所の方が「できるようになって欲しい」という期待度は高いといえる。

⑤服の着脱では、“できるようになって欲しい”層は保育所77.2%に対して幼稚園67.5%と低い。その内訳でも「ぜひとも出来るように」が保育所40.9%に対して、幼稚園31.6%と低い。「なるべく出来るように」は有意差ないが、「努力して」は保育所20.2%に対して幼稚園が30.5%と高い。つまり、保育所は「ぜひとも」層に傾斜した“できるようになって欲しい”層が多数だが、幼稚園は「なるべく出来るように」層がやや高く「ぜひとも」、「努力して」にはほぼ均等に分かれている。これは保育所保育では衣服の着脱は日常的に必要な身辺自立の活動であるということの反映といえる。

第3のグループ、⑦ひとりで歯磨きをする（58.9%）、⑩前後・左右・表裏・大小・多少の区別（54.2%）である。

⑦ひとりで歯磨きをするについてみると“できるようになって欲しい”層は保育所63.4%に対して幼稚園54.1%と低い。その内訳をみると、保育所・幼稚園とも「なるべく出来るように」層は32～33%であり、差はないが、「ぜひとも出来るように」は保育所30.5%に対して幼稚園21.8%と低い。保育所は「なるべく」32.9%、「ぜひとも」30.5%、「努力はして」30.5%と均等に分布しているが、幼稚園は「努力はして欲しい」38.9%、「なるべく」32.3%、「ぜひとも」21.8%と低くなる。以上のことから保育所の方が「できるようになって欲しい」という期待度も高いといえる。

⑩前後・左右・表裏・大小・多少の区別では“できるようになって欲しい”層は保育所59.8%に対して幼稚園49.1%と5割を切っている。内訳をみても、「ぜひとも」、「なるべく」いずれも、保育所の方が5ポイント程度高い。さらに、「努力はして欲しい」が保育所29.5%だが、幼稚園は34.1%と高い。「出来なくてもかまわない」についても、他の項目と異なり、保育所10.6%、幼稚園16.8%を占めている。つまり、幼稚園については、「努力はして欲しい」と「出来なくてもかまわない」を合わせた層が50%を超え、“できるようになって欲しい”層よりやや多いという状況になっている。これは保育所の場合と異なる傾向を示している。知的認識に係わる期待度についても、幼稚園より保育所の方が高い傾向を示している

第4のグループ、⑥脱いだ服をたたむ（43.0%）④ひとりで寝付く（43.9%）について検討してみる。

⑥脱いだ服をたたむでは、全体的にも「できるようになって欲しい」という期待度は低いが、さらに保育所と幼稚園では大きな差異がみられる。“できるようになって欲しい”層は保育所では51.3%と5割を超えているが、幼稚園は34.1%と3割台の水準である。しかも、幼稚園では「努力はしてほしい」が48.0%と5割近い（保育所37.9%）し、「出来なくてもかまわない」が18.0%に達している（保育所10.8%）。

④ひとりで寝付くは、“できるようになって欲しい”という期待度が最も低い傾向を示している。“できるようになって欲しい”層は保育所では48.2%と5割を切り、幼稚園は39.5%と約4割で⑥脱いだ服をたたむよりはやや高い。しかし、保育所・幼稚園とも「努力はして欲しい」が25%にとどまり、「出来なくてもかまわない」が保育所26.5%、幼稚園36.1%ときわめて高い。幼稚園では他の項目よりはるかに高く、トップである。

「脱いだ服をたたむ」、「ひとりで寝付く」という身辺自立の行為は生活習慣の形成のうえできわめて大事なことと思われるが、極端に期待度が低いのはなぜなのか。3歳までにあまり考えなくいいということなのか。それとも、自然に身に付くから心配いらないうということなのか。今後の課題としたい。

以上の分析から、第1グループの①毎朝朝食をとる、②あいさつをする、③排便の習慣、第2グループの⑧手洗い・うがいをするはいずれも、保育所、幼稚園とも“できるようになって欲しい”層が多数である。しかし、他の項目は表8-2にみるように、いずれも保育所の方が“できるようになって欲しい”という期待度が高い。全体として幼稚園通園児の親よりも、保育所通園児の親の方が生活習慣の自立への期待度は高いといえる。これは保育所と幼稚園との保育内容・形態の違いや親の子育て意識や保育所・幼稚園への期待の内容などの違いが複雑に関係しているのではないだろうか。

表 8-2 子どもの生活習慣形成への期待度について (保育所・幼稚園別)

			ぜひとも 出来るよう	なるべく 出来るよう	出来るよう に努力	出来なく てもいい	計
第二グループ	⑤衣服 の着脱	保育所	190	169	94	12	465
			40.9%	36.3%	20.2%	2.6%	100.0%
		幼稚園	139	158	134	9	440
			31.6%	35.9%	30.5%	2.0%	100.0%
	⑨片付 け	保育所	239	157	65	3	464
			51.5%	33.8%	14.0%	0.6%	100.0%
		幼稚園	165	157	112	9	443
			37.2%	35.4%	25.3%	2.0%	100.0%
	⑩言葉	保育所	211	187	64	2	464
			45.5%	40.3%	13.8%	0.4%	100.0%
		幼稚園	167	173	96	4	440
第三グループ	⑦歯磨 き	保育所	142	153	142	28	465
			30.5%	32.9%	30.5%	6.0%	100.0%
		幼稚園	96	142	171	31	440
			21.8%	32.3%	38.9%	7.0%	100.0%
	⑪区別	保育所	103	173	136	49	461
			22.3%	37.5%	29.5%	10.6%	100.0%
		幼稚園	76	140	150	74	440
第四グループ	④ひと りで寝 つく	保育所	73	151	118	123	465
			15.7%	32.5%	25.4%	26.5%	100.0%
		幼稚園	50	123	107	158	438
			11.4%	28.1%	24.4%	36.1%	100.0%
	⑥服を たたむ	保育所	82	158	176	50	464
			17.7%	33.6%	37.9%	10.8%	100.0%
		幼稚園	37	113	211	79	440
			8.4%	25.7%	48.0%	18.0%	100.0%

(漸近有意確率 .000～.246)

表 9 子どもの生活習慣の指導について

		家庭で すべき	どちらか といえ ば家庭	どちらと もいえ ない	園でも 指導	園でも 積極的 に	指導は 不要	その他	計
第1グループ	①朝食	875	22	1	6	3	0	0	907
		96.5%	2.4%	0.1%	0.7%	0.3%	0.0%	0.0%	100.0%
第2グループ	②あいさ つ	508	146	15	188	44	2	3	904
		56.0%	16.2%	1.7%	20.8%	4.9%	0.2%	0.3%	100.0%
	③排便	456	178	39	210	11	4	2	900
		50.7%	19.8%	4.3%	23.3%	1.2%	0.4%	0.2%	100.0%
	④ひと りで寝 つく	552	128	63	52	3	100	8	906
		60.9%	14.1%	7.0%	5.7%	0.3%	11.0%	0.9%	100.0%
第3グループ	⑤服の着 脱	342	188	35	321	18	0	1	905
		37.8%	20.8%	3.9%	35.5%	2.0%	0.0%	0.1%	100.0%
	⑥服をた たむ	306	194	48	322	26	4	3	903
		33.9%	21.5%	5.3%	35.7%	2.9%	0.4%	0.3%	100.0%
	⑦歯磨き	374	167	31	280	44	2	5	903
第4グループ	⑧手洗い	41.4%	18.5%	3.4%	31.0%	4.9%	0.2%	0.6%	100.0%
		276	94	36	408	83	0	2	899
		30.7%	10.5%	4.0%	45.4%	9.2%	0.0%	0.2%	100.0%
	⑨片付け	242	97	30	450	79	0	2	900
		26.9%	10.8%	3.3%	50.0%	8.8%	0.0%	0.2%	100.0%
	⑩言葉	231	122	90	389	40	18	7	897
		25.8%	13.6%	10.0%	43.4%	4.5%	2.0%	0.8%	100.0%
⑪区別		165	75	121	441	67	16	13	898
		18.4%	8.4%	13.5%	49.1%	7.5%	1.8%	1.4%	100.0%

#### 4. 基本的生活習慣の指導について

子どもの生活習慣に関して誰が指導していくべきかを前述の11項目について「家庭で指導すべきである」「どちらかといえば家庭で指導すべきである」「どちらともいえない」「家庭での指導だけでは不十分なので園でも指導して欲しい」「園でも積極的に指導すべき」「指導は不必要である」「その他」の7選択肢で答えてもらった。ここでは「家庭で指導すべき」と「どちらかといえば家庭」を合わせて「家庭指導積極」層と「園でも指導して欲しい」と「園でも積極的に指導」を合わせて「園指導積極」層に大きく分けて特徴づけてみる。「家庭指導積極」層が多い順にグループにわけると、90%台、70%前後、50%台、40%前後の4つのグループに分けて検討してみる(表9)。さらに、＜保育所・幼稚園別＞でみると有意差の認められる項目が多いので、表10にまとめてみた。

第1グループは①毎朝朝食をとる(98.9%)だけであり、当然のように家庭での指導として位置付けている。

第2グループは、④ひとりで寝付く(75.0%)、②あいさつをする(72.2%)、③排便を習慣づける(70.5%)である。

④ひとりで寝付くの「園指導積極」層はわずか6.0%ときわめてすくなく、「指導は不要」が11.0%と高い。これを保育所・幼稚園別にみると、有意差が認められる。「家庭指導積極」層は保育所72.0%に対して、幼稚園80.3%と約8割に達している。内訳をみても「家庭で指導すべき」は保育所53.9%に対して、幼稚園では69.8%に達して「家庭で指導すべき」という傾向が大変強い。それ故、「園指導積極」層は保育所で9.7%、幼稚園では1.6%にすぎない。これは保育所保育では昼寝が毎日の保育カリキュラムに位置づけられているが、幼稚園ではそうしたことがないといった違いからきているといえよう。保育所では昼寝が日常的になっているのに、「家庭指導積極」層が大変多いのも特徴である。また、「指導は不要」が保育所9.1%、幼稚園13.1%に達していて、他の項目にはみられない大きな特徴である。これは「ひとりで寝付く」ことは3歳児にとってできなくても構わないと考えられている割合が高いことを反映していると推測できる。

②あいさつをする、③排便を習慣づけるのいずれもにおいて「園指導積極」層は24～25%であるが、保育所・幼稚園別でクロス集計してみると、やや違いが見られる。②あいさつをするの「家庭指導積極」層についてみると保育所70.4%、幼稚園74.0%、「園指導積極」層は保育所27.2%、幼稚園24.0%である。つまり「家庭指導積極」と「園指導積極」のおおよその割合は幼稚園で7.5対2.5、保育所で7対3であり、幼稚園の方が「家庭指導積極」層がやや多い。

③排便を習慣づけるの「家庭指導積極」層は幼稚園85.2%に達しているが、保育所56.9%である。内訳をみても、「家庭で指導すべき」は保育所38.1%に対して幼稚園64.3%と断然多い。「園指導積極」層は幼稚園11.4%にすぎないが、保育所37.0%に達している。「家庭指導積極」と「園指導積極」のおおよその割合は幼稚園で9対1、保育所で6対4であり、保育所と幼稚園の差は明白である。保育所と幼稚園の保育生活や対象年齢の違いが影響しているのではないかと推測できる。だが、排便の習慣は幼稚園においてもきわめて大切であり、「家庭」だけの指導を強調することによいのだろうか。

第3グループは⑦ひとりで歯磨きをする(59.9%)、⑤服の着脱(58.6%)、⑥脱いだ服をたたむ(55.4%)である。いずれも「園指導積極」層は35～38%であり、差はない。保育所・幼稚園別にみるとやや有意差が認められる。

⑦ひとりで歯磨きをするの「家庭指導積極」層は保育所54.4%、幼稚園66.5%、「園指導積極」層

表 10 子どもの生活習慣の指導について(保育所・幼稚園別)

		家庭指導積極層			園指導積極層			必要なし	計
		家庭ですべき	どちらかといえは家庭	どちらともいえない	園でも指導してほしい	園でも積極的に			
第2グループ	③排便	保育所	176 38.1%	87 18.8%	25 5.4%	163 35.3%	8 1.7%	3 0.6%	462 100.0%
		幼稚園	283 64.3%	92 20.9%	14 3.2%	47 10.7%	3 0.7%	1 0.2%	440 100.0%
	④ひとりですく	保育所	247 53.9%	83 18.1%	42 9.2%	41 9.0%	3 0.7%	42 9.2%	458 100.0%
		幼稚園	305 69.8%	46 10.5%	21 4.8%	7 1.6%	0 0.0%	58 13.3%	437 100.0%
	⑤服の着脱	保育所	137 29.6%	87 18.8%	22 4.8%	211 45.6%	6 1.3%	0 0.0%	463 100.0%
		幼稚園	204 46.3%	102 23.1%	13 2.9%	110 24.9%	12 2.7%	0 0.0%	441 100.0%
第3グループ	⑥服をたたむ	保育所	118 25.5%	93 20.1%	30 6.5%	211 45.7%	9 1.9%	1 0.2%	462 100.0%
		幼稚園	188 42.8%	102 23.2%	18 4.1%	111 25.3%	17 3.9%	3 0.7%	439 100.0%
	⑦歯磨き	保育所	165 35.9%	85 18.5%	22 4.8%	166 36.1%	21 4.6%	1 0.2%	460 100.0%
		幼稚園	209 47.6%	83 18.9%	9 2.1%	114 26.0%	23 5.2%	1 0.2%	439 100.0%
	⑧手洗い	保育所	122 26.5%	50 10.8%	22 4.8%	232 50.3%	35 7.6%	0 0.0%	461 100.0%
		幼稚園	153 34.9%	45 10.3%	14 3.2%	176 40.2%	48 11.0%	2 0.5%	438 100.0%
第4グループ	⑨片付け	保育所	110 23.9%	51 11.1%	21 4.6%	244 52.9%	35 7.6%	0 0.0%	461 100.0%
		幼稚園	132 30.1%	47 10.7%	9 2.1%	206 47.0%	44 10.0%	0 0.0%	438 100.0%
	⑩言葉	保育所	109 23.3%	66 14.1%	59 12.6%	209 44.8%	12 2.6%	12 2.6%	467 100.0%
		幼稚園	123 28.5%	57 13.2%	31 7.2%	180 41.7%	28 6.5%	13 3.0%	432 100.0%
	⑪区別	保育所	77 16.8%	36 7.9%	66 14.4%	234 51.2%	34 7.4%	10 2.2%	457 100.0%
		幼稚園	88 20.5%	40 9.3%	55 12.8%	207 48.3%	33 7.7%	6 1.4%	429 100.0%

(漸近有意確率 .000～.246)

⑬ 表 11 「子どもが出来ない時どうしますか」(保育所・幼稚園別)

	気にか けてい ない	気にな り注意 する	イライラ する	放って おく	その他	合計
保育所	47 10.4%	305 67.2%	27 5.9%	15 3.3%	60 13.2%	454 100.0%
幼稚園	27 6.4%	308 72.5%	20 4.7%	9 2.1%	61 14.4%	425 100.0%
合計	74 8.4%	613 69.7%	47 5.3%	24 2.7%	121 13.8%	879 100.0%

(漸近有意確率 .000)

は保育所 40.7%、幼稚園 31.2%である。幼稚園では“家庭指導積極”層が大変多いが、保育所はやや多いが、“園指導積極”層が接近している。

⑤服の着脱での“家庭指導積極”層は幼稚園で69.4%と約7割に達しているが、保育所では48.4%と5割を割っている。“園指導積極”層についてみると、保育園は46.9%と5割に接近、幼稚園は27.6%と3割にも達していない。幼稚園は“家庭指導積極”層が多数だが、保育所では“家庭指導積極”層と“園指導積極”層とに大きく分かれている。

⑥脱いだ服をたたむについても、“家庭指導積極”層は幼稚園で65.6%だが、保育所では45.6%と5割を割っている。“園指導積極”層についてみると、保育所は47.6%と5割に接近、幼稚園は28.9%と3割にも達していない。これは⑤服の着脱とほぼ同じ傾向にある。

第4グループは⑧手洗い・うがいをする(41.2%)、⑨おもちゃの後かたづけ(37.7%)⑩自分の要求をことばで伝える(39.4%)⑪前後・左右・表裏・大小・多少の区別(26.8%)である。いずれも“家庭指導積極”層が少数であり“園指導積極”層は項目により若干差はあるが多数になっている。⑩自分の要求をことばで伝えるは47.9%にとどまっているが、他の項目はいずれも約53%台～58%台に達している。また⑩、⑪の項目では「どちらとも言えない」が1割前後と多い。保育所・幼稚園別にみると、⑩はほとんど差がないが、⑧は7ポイント、他の項目はほぼ5ポイントの差で幼稚園より保育所の方が“家庭指導積極”層が少なく、“園指導積極”層が多い傾向にある。このグループに属する項目は保育所・幼稚園での指導に期待している傾向が強いといえる。

全体としてみると、第1に、幼稚園の親では家庭指導積極層が多数を占める傾向にあり、生活習慣の確立は家庭の責任でという考えが主流であり、園も「指導してほしい」という期待は保育所に多く、家庭と園との協力でという傾向がみられる。この有意差は特に第2グループの③排便、④ひとりで寝付く、第3グループの⑤服の着脱、⑥服をたたむでは著しい。また、第4グループの⑧手洗い、⑨片づけ、⑩言葉、⑪区別では幼稚園、保育所とも“園指導積極”層が“家庭指導積極”層より多く、5割前後以上を占めている。第4グループの項目は保育所、幼稚園とも家庭と園との協力で生活習慣を身につけさせていこうする傾向が強いといえる。

これを母親の仕事の有無別でみるとほぼ同じ傾向がみられるが、保育所と幼稚園に見られるほどの有意差は認められない。

第2に、この指導のあり方と子どもの生活習慣への期待度をクロス集計して、朝食、あいさつなど各生活習慣の項目をみてみると、一つの特徴がみられる。それは「ぜひとも出来るように」の層はいずれの項目においても、「家庭で指導すべき」の割合が全体の平均より高い。特に、⑧手洗い、⑩言葉では8%強、⑤着脱、⑥たたむ、⑦着脱、⑪区別では10%以上、④ひとりで寝付くでは約20%強平均より高い。また「家庭で指導すべき」層をみると、「ぜひとも出来るように」が全体の平均より高く特に、⑤着脱、⑧手洗い、⑩言葉、⑪区別では平均より10%以上高い。これと比較して「なるべく出来るように」層及び「出来るようになってほしい」層は全体として「園でも指導してほしい」が平均よりやや高い傾向にある。

以上の考察からすると、生活習慣への期待度の高さと「家庭指導」の強調とが相関関係を示す傾向にあるといえる。つまり、子どもの生活習慣の確立への期待度の高い層ほど「家庭責任」を強調する傾向にあるといえる。このことは、過度の期待が家庭責任の異常な強調となり、育児不安を助長することにつながりかねない危険性もあるのではないかと危惧される。これを克服していくには、やはり、家庭と保育所・幼稚園とがどのように協力しながら子どもの生活習慣の自立をすすめていくかということの検討が必要であると考えられる。



### 〈生活習慣の指導のしかた等について〉

子どもの生活習慣に関して身に付けさせるためにどのように考えているかを「その都度指導していく」「気になったときに注意する」「別の機会に指導する」「自分が手本をしてみせる」「手助けしてあげる」「考えたことがない」「いずれ出来るようになるので特に指導しなくてもよい」等で回答してもらった。「その都度指導していく」が最も多く56.4%、「気になったときに注意する」が22.6%であり、「自分が手本をしてみせる」11.9%「手助けしてあげる」6.7%と少ない。全体として何らかの方法できちんと「指導する」と考えていて、大変熱心な様子が見える。これについては全体として保育所、幼稚園に有意差は見られない。

さらに子どもの生活習慣に関して、出来ないことがあると思うかを「気にかけていない」「気になるので注意する」「出来ないのでイライラする」「出来なくても放っておく」「その他」の5選択肢でたずねてみた。「気になるので注意する」が69%と最も高く、「イライラする」5.3%であり、「出来ない」ことに大変気にしていろいろと注意する傾向が大変強いといえる。「気にかけていない」8.3%、「放っておく」2.7%と大変少数である。これは、前問で「その都度指導する」などが大変多く、指導に大変熱心であることのあらわれといえる。尚ここで「その他」の回答が多いのは、選択肢の中から答えを一つ挙げてもらう質問であったのに複数回答をした人が多かったため、「その他」に分類したからである。

これを保育所・幼稚園別にみるとやや有意差が認められる。「気になるので注意する」が幼稚園では72.5%に達し、保育所では67.2%である。「気にかけていない」は保育所10.4%だが、幼稚園は6.4%にすぎない(表11)。

以上のことから、生活習慣が出来ないことに対して、大変気にかけていて、その都度注意したりして指導しているというのが平均的な母親の姿として浮かびあがってくる。どの程度出来ないとか気になるのか、どのような注意や指導をおこなっているか等の内容については今回の調査においてなされなかったため、今後の検討課題とする。

## 5. 習い事について

次に、最近の子育ての中でも父母が熱心に取り組んでいると思われる習い事の状況について検討してみる。まず、習い事をしているかどうかという問に対して「現在している」子どもが27.8%、「以前していた」子どもが1.8%、「近いうちに何かさせたい」と考えている人が7.1%、「本人がしたいといえさせたい」と考える人が47.5%、「迷っている」人が4.3%、「させる必要はない」と考える人が9.2%であった。現在習い事をしている人を含めこれから何かさせたい、しようかどうか迷っている人を合わせると9割以上にのぼり、子どもに習い事を「させる必要はない」と考えている人を大きく上回っている。このことから幼児を持つ父母にとって習い事はひとつの大きな関心事であることがうかがえる。

まず〈子どもの年齢別〉でみてみると、「現在している」と答えているのは3歳児では14.6%、4歳児31.7%、5歳児では43.5%と増える。すでに0～2歳児において、「本人がしたいといえさせたい」、「近いうちに何かさせたい」などが約70%台に達している。年齢が上がるにつれて、「習い事」に通う子供が増えるという状況にあるといえる。3歳児では「現在している」14.6%、「近いうちに何かさせたい」11.5%に増え、「本人がしたいといえさせたい」54.8%を加えると約81%になる。4歳、5歳では「現在している」が増え、「近いうちにさせたい」、「本人がしたいといえさせたい」

表 12-1 習い事について（子どもの年齢別）

	現在して いる	以前して いた	近いうち 何かさせ たい	本人がした いといえ ばさせたい	迷ってい る	させる必 要はない	合計
0歳児	1 3.3%	0 0.0%	1 3.3%	0 0.0%	23 76.7%	5 16.7%	30 100%
1歳児	1 3.2%	0 0.0%	1 3.2%	23 74.2%	2 6.5%	4 12.9%	31 100%
2歳児	6 7.9%	1 1.3%	6 7.9%	49 64.5%	5 6.6%	9 11.8%	76 100%
3歳児	23 14.6%	3 1.9%	18 11.5%	86 54.8%	9 5.7%	18 11.5%	157 100%
4歳児	86 31.7%	5 1.8%	16 5.9%	129 47.6%	7 2.6%	28 10.3%	271 100%
5歳児	114 43.5%	7 2.7%	19 7.3%	93 35.5%	12 4.6%	17 6.5%	262 100%
合 計	231 27.9%	16 1.9%	61 7.4%	380 45.9%	58 7.0%	81 9.8%	827 100%

（漸近有意確率，.000）

表 12-2 習い事について（保育所・幼稚園別）

	現在して いる	以前して いた	近いうち 何かさせ たい	本人がした いといえ ばさせたい	迷ってい る	させる必 要はない	合計
保育所	65 14.5%	3 0.7%	31 6.9%	280 62.5%	25 5.6%	44 9.8%	448 100.0%
幼稚園	186 42.9%	13 3.0%	33 7.6%	149 34.3%	14 3.2%	39 9.0%	434 100.0%
合 計	251 28.5%	16 1.8%	64 7.3%	429 48.6%	39 4.4%	83 9.4%	882 100.0%

（漸近有意確率，.000）

表 13-1 習い事の種類について（男女別）

	水泳	バレエ	リトミック	音楽	日本舞踊	学習塾	英語塾	習字	芸能	その他	合計
男	202 54.0%	2 0.5%	1 0.3%	57 15.2%	2 0.5%	30 8.0%	45 12.0%	30 8.0%	2 0.5%	3 0.8%	374 100.0%
女	117 29.5%	12 3.0%	3 0.8%	193 48.6%	1 0.3%	18 4.5%	20 5.0%	30 7.6%	2 0.5%	1 0.3%	397 100.0%
計	319 41.4%	14 1.8%	4 0.5%	250 32.4%	3 0.4%	48 6.2%	65 8.4%	60 7.8%	4 0.5%	4 0.5%	771 100.0%

表 13-2 習い事をすすめた人について（男・女別）

	本人	父	母	他人に誘 われた	その他	合計
男	45 35.2%	11 8.6%	43 33.6%	15 11.7%	14 10.9%	128 100.0%
女	93 63.3%	3 2.0%	41 27.9%	5 3.4%	5 3.4%	147 100.0%
合計	138 50.2%	14 5.1%	84 30.5%	20 7.3%	19 6.9%	275 100.0%

（漸近有意確率，.000）

を加えた「習い事に肯定的」な層は約85～86%に増え、「させる必要はない」はわずか7～10%台に減少している(表12-1)。

このことから、子どもの年齢に応じて父母は子どもの年齢が低いときにはさせる必要がないと思っていた人でも周りの子どもが通っていたり、本人がしたいと言い出すことで習い事の必要性を意識するようになり、次第に習い事に通う割合が増えていくのではないかと考えられる。

また<母親の職業の有無>でみると、母親が仕事をしていない場合は「現在している」と答えたのが41.3%に対して有職者の場合23.5%であり、「本人がしたいといえさせたい」と答えた人も母親が仕事をしていない場合は33.5%であるのに対して有職者の場合54.8%と、両者の間で差がみられた。自由記述の中に『行かせてあげたいが仕事をしているので送り迎えができない』といった意見が聞かれたように、特に幼い子どもの場合など、習い事をするのはやりたいという意志だけでなく、行かせてあげられる環境が整っているのかどうか大きなポイントのようである。

<保育所・幼稚園別>にみても、はっきりとした有意差が見られる。「現在している」は幼稚園では42.9%に達しているが、保育所では14.5%にすぎない。特に幼稚園では「近いうち何かをさせたい」7.6%を加えると5割強の2人に1人が「習い事」を行う傾向にあり、「本人がしたいといえさせたい」34.3%を加えた「習い事に肯定的」な層は約85%を占めている。保育所では「現在している」は少ないが、「本人がしたいといえさせる」62.5%とあり「近いうち何かをさせたい」6.9%を加える「習い事に肯定的」な層は84%と幼稚園と変わらない。個々の対応では有意差は見られるが、「習い事に肯定的」な層が多数であることには有意差はない。なお「習い事」に否定的な層は約1割前後で差はみられない(表12-2)。

#### <習い事の種類について>

習い事の種類についてみると、最も多いのは水泳41.4%であり、次いで音楽教室32.4%、リトミック、バレエ、日本舞踊を含めた音楽関係で約35%となる。英語塾8.4%、習字7.8%、学習塾6.2%である。これを子どもの性別でみると、男子と女子の傾向ははっきりと異なっている。男子は水泳54.0%と大変多く、音楽関係は約17%弱にとどまり、英語塾・学習塾が約20%と目立つ。これに対して女子は音楽関係が約53%、水泳は約30%と多いが、英語・学習塾は約10%弱にとどまっている(表13-1)。男子はスポーツ系、女子は音楽系という傾向はベネッセ教育研究所「第2回幼児の生活アンケート報告書」(2000年9月)とほぼ同じといえる<sup>(3)</sup>。

#### <習い事をすすめた人は>

次に習い事をしていると答えた人に習い事を誰がすすめたのか聞いたところ、「本人」がもっとも多く50.2%、次いで「母」が30.5%、「他人に誘われた」7.3%、「その他」6.9%、「父」5.1%という結果であった。「その他」の中には『祖母』『親子で話し合って決めた』『母がさせたく思い、本人にやりたいかどうか聞いた』などが挙がっていた。約半数が子どもの意志で習い事を始めており、また先の質問で「本人がしたいといえさせたい」という回答が多かったことから習い事に関しては子どもの意志が尊重されているようである。しかし一方では「他人に誘われた」が「父」を上回るなど、父親の子どもに対する意識の低さがうかがえる。アンケートの記入者の大半が母親であったため母親の意見が強く反映されているということは想像に難くないが、ここで父親と母親の意見が同一であったかどうかは明らかではない。

習い事を誰が希望したかを子どもの性別でクロス集計したところ、有意差が認められた。「本人」が習い事を希望したのは男の子の場合35.2%であるのに対して女の子は63.3%,そして「他人に誘われた」のは女の子が3.4%しかないのに男の子では11.7%になっており、女の子の方が習い事に対して積極的な姿勢がみられるようである。また「父親」の働きかけによるものも男の子に対しては8.6%あるのに女の子には2.0%しかなく、子どもの性別の違いによって周囲の対応が変化していることがうかがえる(表13-2)。

#### 〈習い事をする理由、しない理由について〉

次に「現在している」「以前していた」「近いうちに何かさせたい」「本人がしたいといえさせたい」と答えた人に対して子どもが習い事をする事についてどう考えているか聞いたところ、「身体的・情緒的な発達を促すため」と考える人が一番多く56.1%,「小さい頃から始めた方がよいから」が14.5%,「何か取り柄があった方がいいから」7.7%,「将来に備えて技術を身に付けるため」3.8%,「友達を作るため」2.3%,「将来の進学に役立てるため」1.7%,「周りの友達が通っているから」0.6%という順番だった。「その他」は13.3%あり、主なものは複数回答を挙げたものであったが、なかにはかけもちして習い事をする子どもがいるのでそれぞれで理由が異なったり、子どもと親で習い事に通う理由が異なるなどの事情があるようである。またそのほかにも『上のきょうだいが行っているのをみて行きたかった』『喘息にいいと聞いたから水泳を始めた』といった理由も挙げられていた。保育所・幼稚園の有意差はみられない。

さらに「迷っている」「させる必要はない」と答えた人に対して、どうしてそう思うのか理由を聞いたところ、「遊びの方が大切なので」と答えた人が41.5%,「その他」が26.8%,「小さい子どもにはふさわしくない」17.9%,「よくわからない」7.3%,「必要ないと思うが周りの友だちが通っているので(迷っている)」6.5%であった。「その他」の割合がほかの理由に比べて高いが、『まだ小さいので考えていない』『小学生になったらさせたい』など年齢を理由に挙げるものや、『経済的に無理』だとか、先に述べたように『送り迎えがしてあげられない』などの家庭の事情を挙げるものが多かった。保育所・幼稚園別にみると若干の有意差が見られる。「遊びの方が大切」では幼稚園50.0%に対して保育所34.3%,「小さい子どもには好ましくない」では保育所23.9%に対して幼稚園10.7%と低いなどの差がみられる。

### 6. 保育所・幼稚園に通う理由

保育所、幼稚園の年齢構成をみると、保育所では0・1歳児15.4%,2歳児15.4%,3歳児22.6%,4歳児29.3%,5歳児17.3%となっている。これに対して幼稚園では5歳児46.8%と最も多く、4歳児37.2%,3歳児は16.0%となっている。

次に現在通っている保育所・幼稚園を選んだ理由について選択肢の中から二つ選んでもらった。

「集団保育を受ける年齢に達したと思うから」が25.3%,「家や職場から近いから」が22.8%を占めており、これらがその施設を選んだ二大理由となっていることがわかった。続いて「園の方針や教育内容に共感したから」13.5%,「勤務時間との都合がいいから」10.9%,「延長保育などのサービスが充実しているから」8.8%,「保育料が安いから」6.7%となっており、仕事との両立を念頭に置きつつも、保育内容や保育の質が保護者の園選びにとっての基準となっているようである。「育児休暇が取れない・取りづらいから」「自分の時間が取れるから」といった保護者の都合的な回答は2%

前後と低い数字を示した。

保育所・幼稚園別にみると大きな有意差が認められる。幼稚園は「集団保育を受ける年齢に達したから」が35.8%と最も多く、次いで「園の方針や教育内容への共感」19.7%、「家や職場から近い」14.0%、「保育料が安いから」12.9%の順である。これに対して保育所の場合は「家や職場から近い」31.1%、「勤務時間との都合」18.5%、「集団保育を受ける年齢に達したから」15.5%、「延長保育などの保育サービスの充実」12.9%の順であり、仕事や勤務にかかわる内容に傾斜している(表14)。

さらに園を決めるにあたってどのようなことをしたかについて調べてみた。

最も多いのは「見学した」20.7%、次いで「在園児の親から聞いた」18.2%、「情報収集して検討した」14.5%、「近所の親から」6.4%と約6割が園選びに積極的な姿勢で望んでいるといえるが、一方で、「周りが皆行くから決めた」12.1%や「ここしか入れなかった」10.5%などという状況もみられる。「その他」には「他に周りに園がない」といった、同じく仕方なく通っている状況があったり、第2子以降では、上のきょうだいを通わせていたのでそこに決めた、という回答が寄せられていた。

これを<保育所・幼稚園別>にみるとやはり違いが見られる。幼稚園では最も多いのは「見学」25.1%、次いで「在園児の親」19.6%、「情報収集」17.1%「近所の親から」7.1%の順で、これらをあわせると約7割強であり園選びに積極的な傾向にある。保育所の場合は「在園児の親」17.0%、「見学」16.5%、「情報収集」12.1%、「近所の親から」5.7%であり、園選びの積極派は5割にとどまり、「ここしか入れなかった」15.0%、「周りが皆行くから決めた」14.8%も占めている。これは保育所の制度的特徴から生じているといえる(表15)。

## 7. 家庭と園との関わりに

家庭と園との関わりについて検討してみるために、親が子どもの様子などについて保育者と伝えたり・話し合ったりするのを、どのような機会に行っているか尋ねてみた(複数回答)。

「子どもの送り迎えの時」が40.2%と最も多く、次いで「懇談会や研修会の時」25.9%、「園の行事の時」18.4%、「話しがあれば園に行く」7.7%、「あまり話しをしたことがない」3.1%である。園の行事なども担任の先生と話をする機会として活用されているようである。しかし、「その他」4.6%であるが、その大半が毎日の子どもの様子を知るためということで『連絡帳』『連絡ノート』をあげていた。これを<保育所・幼稚園別>にみると、その傾向にやや異なりが見られる。保育所の場合は「子どもの送り迎えの時」が最も多く49.8%に達していて、次いで「懇談会や研修会の時」19.6%、「園の行事の時」17.6%となっている。つまり保育所では毎日の送り迎えの時間に子どもについて話し合うことが定着していて、それを補うことで園が主催する懇談会や行事の時に担任との話し合いの場として位置づけているといえる。幼稚園については「懇談会や研修会の時」32.0%、「子どもの送り迎えの時」30.9%と大きく分かれ、それを補うようにして「園の行事の時」19.3%、「話しがあれば園に行く」9.6%となっている。これは、保育所の場合、親が子どもを直接保育所に預けにいくというシステムが定着していることに起因する。幼稚園の場合スクールバスの活用が広がっていることで、「子どもの送り迎えの時」が少なくなり、対応の仕方が大きく分かれていくということであろう(表16)。

また、担任の先生は信頼できる先生かどうか尋ねてみると、「非常にそう思う」が33.7%、「そう思う」が55.6%と、9割近くが担任の先生に信頼を寄せており、「どちらともいえない」8.7%、「あまりそう思わない」0.9%を大きく上回った。その他の記述に『先生を信頼しないと子どもを預けて

表 14 保育所・幼稚園に通う理由  
(保育所・幼稚園別)

	保育所	幼稚園	合計
勤務時間との都合	145 18.6%	20 2.7%	165 10.9%
育児休暇がとれない	15 1.9%	2 0.3%	17 1.1%
自分の時間がとれるから	9 1.2%	10 1.4%	19 1.3%
集団保育を受ける年齢	121 15.5%	263 35.8%	384 25.3%
周りの子供が行っているから	36 4.6%	34 4.6%	70 4.6%
将来のことを考えて安心できる	5 0.6%	8 1.1%	13 0.9%
保育料が安いから	7 0.9%	95 12.9%	102 6.7%
家や職場から近いから	243 31.1%	103 14.0%	346 22.8%
園の方針や保育内容に共感	59 7.6%	145 19.7%	204 13.5%
延長保育などのサービスが	101 12.9%	32 4.4%	133 8.8%
その他	35 4.5%	21 2.9%	56 3.7%
わからない	5 0.6%	2 0.3%	7 0.5%
合計	781 100%	735 100%	1516 100%

表 16 担任の先生と話す機会は(保育所・幼稚園別)

	送り迎え時	行事の時	懇談会等	話があれは園に行	あまりしない	その他	合計
保育所	360 49.8%	127 17.6%	142 19.6%	41 5.7%	22 3.0%	31 4.3%	723 100.0%
幼稚園	231 30.9%	144 19.3%	239 32.0%	72 9.6%	24 3.2%	37 5.0%	747 100.0%
合計	591 40.2%	271 18.4%	381 25.9%	113 7.7%	46 3.1%	68 4.6%	1470 100.0%

表 17 家庭と園との教育方針が異なったときは(保育所・幼稚園別)

	家庭では家庭の方針で	園の方針を参考に	家庭の方針に沿うよう園に	子供が従う方	その他	合計
保育園	139 31.3%	210 47.3%	19 4.3%	46 10.4%	30 6.8%	444 100.0%
幼稚園	194 45.8%	147 34.7%	11 2.6%	34 8.0%	38 9.0%	424 100.0%
合計	333 38.4%	357 41.1%	30 3.5%	80 9.2%	68 7.8%	868 100.0%

(漸近有意確率 . 000)

表 18 近所の子どもの遊び(保育所・幼稚園別)

	ある層		ない層		合計
	よくある	時々ある	ほとんどない	全くない	
保育所	110 24.7%	133 29.9%	131 29.4%	71 16.0%	445 100.0%
幼稚園	186 42.6%	143 32.7%	75 17.2%	33 7.6%	437 100.0%
合計	296 33.6%	276 31.3%	206 23.4%	104 11.8%	882 100.0%

(漸近有意確率 . 000)

表 15 通園する保育所・幼稚園の選択の方法について(保育所・幼稚園別)

	見学	在園児の親から	近所の親から	情報収集	周りがみない	ここしか入れない	その他	合計
保育所	67 16.5%	69 17.0%	23 5.7%	49 12.1%	60 14.8%	61 15.0%	77 19.0%	406 100.0%
幼稚園	95 25.1%	74 19.6%	27 7.1%	65 17.2%	35 9.3%	21 5.6%	61 16.1%	378 100.0%
合計	162 20.7%	143 18.2%	50 6.4%	114 14.5%	95 12.1%	82 10.5%	138 17.6%	784 100.0%

(漸近有意確率 . 000)

表 19 地域の子どもの交流の工夫(保育所・幼稚園別)

	近所の友達と遊ぶよう	育児サークルに参	公園で遊ぶようにする	保育施設での交流会に参加	塾・習い事に行く	その他	合計
保育所	123 35.7%	10 2.9%	55 15.9%	72 20.9%	1 0.3%	84 24.3%	345 100.0%
幼稚園	175 50.3%	10 2.9%	51 14.7%	25 7.2%	10 2.9%	77 22.1%	348 100.0%
合計	298 43.0%	20 2.9%	106 15.3%	97 14.0%	11 1.6%	161 23.2%	693 100.0%

(漸近有意確率 . 000)

働きにいけない』といった声もあった。これは保育所・幼稚園との有意差は認められない。

そこで家庭と園で教育方針が異なった場合どうするか尋ねたところ、「園の教育方針を参考にする」が41.1%、「家庭では家庭の教育方針で子どもと接する」が38.4%と大きく分かれた。「子どもが従う方に任せる」は9.2%、「家庭の教育方針に従うように園に要請する」は3.5%だった。「その他」(7.8%)の内容は『とにかく話し合う』『教育方針が異なったことがないのでわからない』『教育方針で選んだ園なので意見が食い違うことは考えがたい』『子どもにとっていい方考える』などであった。これを保育所・幼稚園別にみるとやや傾向に異なりが見られる。

保育所の場合は「園の教育方針を参考にする」が47.3%と最も多く、次に「家庭では家庭の教育方針で子どもと接する」31.3%であるが、これに対して幼稚園では「家庭では家庭の教育方針で子どもと接する」が45.8%と多数で、次いで「園の教育方針を参考にする」34.7%であり、きわめて対照的である(表17)。保育所の方は保育所の方針を積極的に受け止めていこうとする傾向が強い。幼稚園の場合は、「園では教育、家庭はしつけ」等と分けて考えようとする傾向が強くあらわれているのではないだろうか。これは1日の大半を過ごす保育所と教育を強調した短時間保育の幼稚園との相違から生ずる親の意識の違いなのではないか。

## 8. 近所の同年齢の子どもとの交流

子どもが近所の同年齢の子どもと遊んだりするかどうか聞いたところ、「よくある」33.6%、「時々ある」31.3%と両者をあわせた「ある」層が約65%、「ほとんどない」23.4%、「まったくない」11.8%であり、「ない」層が約35%に達している。近所の同年齢の子どもと遊ぶことが自然なすがたであるにもかかわらず、「ほとんどない」「まったくない」が約3分の1占めていることは、子どもの生活や発達にとって、親の子育てにとって不安な点であり、好ましい状況とは言えず、問題視すべき点であろう。

この問題を詳しく分析するために保育所・幼稚園別及び子どもの年齢別でクロス集計して見てみる。

保育所・幼稚園別に見ると、幼稚園では「ある」層が約75%と多数であり、「ない」層は約25%である。これに対して保育所は「ある」層が約55%、「ない」層約45%とである(表18)。保育所の場合は0～2歳児が3割強、幼稚園は5歳児が5割弱を占めていることから、＜年齢別＞でクロスして検討してみた。0・1歳児では「ある」層約3割、「ない」層は7割、2歳児、3歳児で「ある」層約5割強、「ない」層が約5割弱となっている。こうして年齢が上がるにつれて「ある」層が増え、4歳児で約7割、5歳児で8割に達している。「ない」層の割合は年齢が上がるごとに減少しているものの、4歳児で約3割、5歳児でも約2割の子どもたちが友だちと遊ぶことが「ほとんどない」「まったくない」ということになる。この要因として考えられるのが園児の習い事やテレビ中心の生活等をあげることができよう。また少子化、過疎化の影響で『まわりに同年齢の子どもがいない』といった声も多く寄せられている。

このような状況の中で、子どもが近所の同年齢の子どもと遊べるように工夫しているか聞いたところ、「自然と近所の子どもと遊んでいるので心配しない」と答えた人が45.4%、「特別考えたことはない」が47.8%と大きく二つに分かれ、「色々と工夫している」と答えた人はわずか6.8%にすぎない。保育所・幼稚園別にみると、保育所では「特別考えたことはない」56.3%と最も多く、「心配しない」37.0%であるが、幼稚園では「心配しない」54.0%、「特別考えたことはない」39.2%とき

わめて対照的である。しかし「色々と工夫している」はいずれも6%台で変わらない。いずれにしても、きわめて楽観的な傾向にあるといえる。

#### 〈地域での交流について〉

そこで同じ地域に住む同年代の子どもたちとふれあう機会をどのように工夫しているか具体的にその状況を尋ねてみた。「近所の友だちと遊ぶように近所づきあいを始めている」のが43.0%,「よく公園で遊ぶようにしている」15.3%,「保育施設等の交流会に参加」14.0%となっており,「育児サークルに参加」「塾・習い事にいくようにしている」と答えた人は,それぞれ2.9%, 1.6%と育児サークルや習い事は子どもの友だちづきあいの機能をあまり果たしていないようである。また前問で「特別考えたことがない」と答えた人が多かったためか「無回答」も多く,「その他」も23.2%あるが,大半が「心配しない(から工夫もしていない)」「考えたことがない(から何もしていない)」という内容で,少数意見としては『小学生の子供会の行事に参加する』といった声が挙がっていた。先に『近所に同年齢の子どもがいない』という現状があったが,『地域の子ども同士のふれあいが少なくなった今,園がその役割を果たしているのではないだろうか』といった意見が聞かれた。また,保育所・幼稚園別でみると,「公園で遊ぶ」は変わりはないが,「近所付き合い」と「保育施設の交流会」との比率が対照的になっている。「近所付き合い」は幼稚園50.3%と多いが,保育所35.7%と低くなっている。「保育施設の交流会」では保育所20.9%を占めているが,幼稚園は7.2%にすぎない(表19)。保育所の場合は地域の子どもの参加した遊ぶ会などの交流会に積極的に参加させていこうとする傾向が定着し始めているのであろう。「近所付き合い」も大切だが,子どもや親が交流できる多様な形態があることも必要であり,保育所・幼稚園の新たな役割が求められているといえる。

#### 《参考・引用文献》

- (1) 庄司順一他「我が国の伝統的育児に関する妥当性の検討『3歳児神話』の検討」(厚生省心身障害研究「少子化についての専門的研究」平成9年度研究報告書所収 P 225～264 参照)
- (2) 厚生省監修「平成10年版厚生白書-少子社会を考える」(ぎょうせい 2000年10月刊)
- (3) 大日方雅美「子育てと出会うとき」(日本放送出版協会 1999年2月刊)  
高野陽他「社会環境が結婚・出産に及ぼす影響に関する研究」(厚生省心身障害研究「少子化についての専門的研究」平成9年度研究報告書所収 P 139～263 2000年3月刊)
- (4) ベネッセ教育研究所「第2回 幼児の生活アンケート報告書」(研究所報 VOL. 22 2000年9月刊)、P 52～53
- (5) 前掲書「第2回 幼児の生活アンケート報告書」P 38
- (6) 厚生省人口問題研究所編集「平成4年 日本人の結婚と出産-第10回出生動向基本調査」(厚生統計協会 1993年12月刊)
- (7) ベネッセ教育研究所「第1回幼児の生活アンケート報告書」(研究所報 VOL 8 1996年4月刊)
- (8) ベネッセ教育研究所「子育て生活基本調査報告書」(研究所報 VOL. 14 1998年3月刊)
- (9) ベネッセ教育研究所「子育て生活基本調査報告書Ⅱ」(研究所報 VOL. 19 1999年7月刊)
- (10) NHK放送文化研究所編「日本人の生活時間・1995-NHK国民生活時間調査」(NHK放送文化研究所 1996)



年 10 月刊)

- (11) 日本労働組合総連合会「働く女性は子どもをどのように育てているか-働く女性の就業と保育に関する調査」(1993 年 8 月刊)
- (12) 日本労働組合総連合会「女性の労働・生活時間実態調査報告書」(1993 年 11 月刊)
- (13) 自治労連保育部会・協力保育研究所「日本の子育て」(ひとなる書房 1992 年 8 月刊)
- (14) 厚生大臣官房統計情報部編「平成 8 年版人口動態社会経済面調査報告-働く女性の出産」(厚生統計協会 1997 年 10 月刊)
- (15) 総理府編「平成 10 年版 男女共同参画白書」(大蔵省印刷局 1998 年 7 月刊)
- (16) 大日方雅美「母性の研究」(川島書店 1988 年 6 月刊)
- (17) 恒吉僚子, S. ブーコック「育児の国際比較-子どもと社会と親たち」(日本放送出版協会 1997 年 10 月刊)
- (18) 諏訪きぬ, 戸田有一, 堀内かおる共編著「母親の育児ストレスと保育サポート」(川島書店 1998 年 2 月刊)
- (19) 正高信男「育児と日本人」(岩波書店 1999 年 11 月刊)
- (20) 目黒依子, 矢沢澄子編「少子化時代のジェンダーと母親意識」(新曜社 2000 年 10 月刊)